

「主よ、お話しください。僕は聞いております」
(旧約聖書 サムエル記上2章9節より・・・5月の聖句)

古今東西、宗教の基本は「聞くこと」です。神様の御声を聞く、仏の説話を聞く、巫女の宣託を聞く、イタコの口寄せを聞く、などなど。人ならざるものが直接か、あるいは、人や物を通して語り掛ける、この世の理を超えた言葉に耳を傾けるのが、宗教の基本形です。自然現象の一つである「雷」も、語源を辿れば「神鳴り」というらしく、ここにも神が生み出すと信じられた轟音(=雷鳴)を「聞く」という古代人の感性が見受けられます。

キリスト教の前身であるユダヤ教は、この「聞く」ということを極めた宗教でした。「シエマー・イスラエル」(ヘブライ語: שִׁמְרָא יִשְׂרָאֵל) 意味:「聞け、イスラエルよ」という宣言は、ユダヤ教の合言葉のようなもので、とにもかくにも「神様の言葉を聞け」という要請が徹底されていました(「イスラエル」とは、ユダヤ教国家の国名であり、ユダヤ教の代名詞)。キリスト教も、その伝統を引き継ぎ、神様の御言葉に耳を傾ける(=聖書を読む&説教を聞く)という習慣を続けています。5月の聖句も、そんな習慣的背景があつてのもので、「主」とは、神様を呼ぶ時の一般的な呼称で「しゅ」と読みます。「僕」は、「ぼく」と読んでも意味は通りますが、一応「しもべ」と読みます(なんで「しもべ」と「ぼく」が同じ漢字なんでしょうね)。

この聖句を最初に受け取つたのは、まだ幼さ残るサムエルという男の子でした。サムエルは、夜な夜な語り掛ける正体不明の声を聞きましたが、それは自分の師匠であるエリの声だと思ひました。夜更けにサムエルは師匠エリの寝室を訪ねて「なんか用？」と訊きます。エリは「呼んでへん」と答えます。そんなやり取りを何度か続けるうちに、師匠エリが「それは神様の呼びかけだから」と言い、5月の聖句を教えたのです。再び正体不明の声を聞いた時、サムエルは教えられた5月の聖句を、そのまま語りました。そして、更なる「主の御言葉」を聞くことになります。

この「更なる御言葉」と言うのは、一聴して不穏なものでした。全然、良い話じゃなかったということです。ただ、しっかりと傾聴し、吟味し、表面的な意味の下にある、奥深い真意を探ることで、神様の不穏な言葉は、少しずつ未来を展望できる明るさを持つようになりました。神様の言葉を聞く時は「傾聴」と「吟味」が不可欠です。サラッとだけ聞いて、理解したつもりになるのが、実は一番アブナイし、カナシイ・・・でも、それは人間関係においても一緒ですよ。

「言葉」というものは基本的に「欠損した情報」です。私たちの頭の中にあるウネウネ、コロコロした、まさに「筆舌に尽くし難い」思考と感情を、「言葉」という圧縮パッケージに入れて、私たちは発信しています。考えや思ひは「言葉」にした時点で、圧縮・短縮・簡素化されて、何かしら欠けているものです。ちなみに、そういう風に「欠ける」ことが許されない場合、保険契約書とか使用許諾書とか法律文とか哲学書みたいな超絶難解で長たらしい記述(口述)が必要になってきます。でも、日常生活で法律文みたいな会話って、まあ、無理ですよ・・・だから、私たちは「欠損した情報」をやり取りしていることを前提に、コミュニケーションを取らないといけません。人に対しても、神様に対しても、です。そこで、重要なのが「傾聴」と「吟味」というわけです。「深読み」と表現される受け止め方は、これは自分の願いや都合が反映された受け止め方なので推奨はしません。大事なのは、相手の立場に立って、耳を傾け、受領した言葉を、即座に理解したつもりにならず、十分に吟味・考察し、丁寧に受け止めること。相手の言葉も、自分の言葉も、どこか欠けていることを知って、できる限り慎重に聞き、慎重に話すこと。まあ、時には激烈な言葉が、新たな境地を開くことはありますが・・・、乱発は控えた方がいいですよ、きっと。じゃないと、リアルでもネットでも「炎上」してしまいます。

子ども達の言葉は未熟です。でも、大人同士の言葉だって不完全です。大切なのは、心から傾聴し、吟味し、受け止めること。敦賀教会幼稚園は、そんな丁寧なコミュニケーションを意識し、子ども達と喜びを分かち合い、つらい気持ちも共有する、そんな保育・教育を続けています。